

CAGLIERO

カリエロ11 サレジオ会
宣教ニュース

N.138 - 2020年6月



サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信

サレジオ・ミッションの友人である皆さん、

コロナウィルスの世界的蔓延の中、サレジオ会ローマ本部の宣教部門は、2020年3月25日、ドン・ボスコ・ネットワークの助けを得て、分かち合いと計画のためのオンライン・ミーティングを行いました。「コロナウィルスと闘うドン・ボスコ世界の連帯」のコーディネーター、ジョージ・メナンバランビル神父の疲れを知らない働きのおかげで、世界中のサレジオ宣教事務局と、ドン・ボスコ・ネットワーク、管区開発事務局PDOなどの組織のメンバーは、皆で人のいのちを救うため、ネットワークを構築し、取り組みを連携させています。

この緊急事態は宣教についての大事な教訓をすでに私たちに教えてくれています。何よりも、このパンデミックは、厳しい現実をあらわにしました：私たちはすべての答え、必要なすべての手段を持ち合わせていないということです。もしかすると私たちは、緊急事態に対応するために、正しい問いかけさえしていないのかもしれない。そのため私たちは、行っている良いことで満足することはできません。効果的により多くの人を助けるために、ほかの人々や団体と連携する必要があります。それは大変なことのように感じられるかもしれませんが、インスピレーションと新鮮さももたらしてくれます。

「これまでいつもこのようにやってきた」などと、誰も考えることさえできないと私たちは今、気づいています。パンデミックによって、これまでいつもしてきた多くのやり方を変えざるを得なくなっています。自分たちがウィルスに感染する危険をおかしてでも、最も見捨てられ、忘れられた人々、助けを求めることさえできない人々に助けの手を差し伸べるには、愛、責任ある取り組み、献身、人のいのちへの関心が必要であることを、パンデミックによって私たちは教えられています。

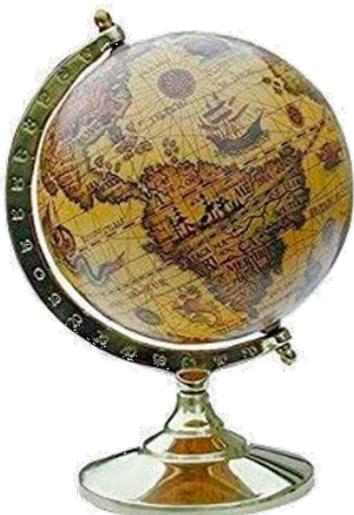
対等のパートナーとして人々と協力するには謙遜が必要であることを、この緊急事態は私たちに思い起こさせます；かつて直面したことのない緊急な状況に対し、新たな解決策を生み出すために想像力と創意工夫が必要であること；適正な記録、財務の透明性、支援者から頂いた支援に応える報告を確保するために、自らを律する規律が必要であること；危機は不可知論者や無神論者にさえ福音を告げる第一次福音宣教の肥沃な機会であると目覚めるには、宣教の精神が必要であること；何よりも、このあらゆる取り組みが、最後にいのちが死に打ち勝つことを保証してくださるイエス・キリストへの私たちの愛の具体的な表現であることを思い起こすため、信仰が必要です；悪ではなく、神が最後に勝利されます。実に、このイエスのみ心の月は、力強いしるしです！ あわれみ深い神の、愛に満ちたみ心を全世界に明かす生き方をするよう、私たちに思い起こさせるのです。

宣教顧問 アルフレド・マラヴィジャ神父



ドン・ボスコの宣教の理想は、高校生活の終わりごろすでに彼の内に息づいていましたが、時とともに成長し熟していきました。トリノの、全寮制のアジジの聖フランシスコ司祭研修学院で司牧の養成期間を終える頃(1844年)、ドン・ボスコは聖母奉献会に入会することを考えました。聖母奉献会はインドシナ(ベトナム)に盛んな宣教拠点を開いたところだったので、ドン・カファッツォは、トリノの若者の間の“宣教地”へとドン・ボスコを方向づけました。ドン・ボスコが最も好きだった読み物は、布教省の年次報告に掲載される宣教地の報告でした。1848年以降、ドン・ルアやそのほか何人かは、ドン・ボスコが何度か感嘆して言うのを聞いています：「ああ、多くの司祭、多くの神学生がいたなら福音宣教に送り出せるのだが、バタゴニアに、ティエラ・デル・フエゴに……」同じ頃、世界地図に見入っているドン・ボスコの姿が目撃されています。「いまだに多くの地域が死の陰の中にある」ことに震えながら。そして、言葉に尽くせない犠牲の後、ドン・ボスコはとうとうアルゼンチンへの宣教事業を開始することができました(1875年)。アルペラ神父は書いています。「それ以降、宣教事業はドン・ボスコの心の中核であり、そのためだけに生き続けているかのようであった。……ドン・ボスコが宣教についてあまりに情熱をこめて語るの、聞いている者は驚き、ドン・ボスコの靈魂への熱意に、大いに身を正される思いをするのだった。」

宣教派遣：ドン・ボスコは、多くの国から宣教師派遣の要請を受けていましたが、アルゼンチンから始めることにしました。1875年11月11日に派遣されたこの最初の宣教団は10人で構成されていました。ヨーロッパにおける派遣もおろそかにされませんでした。サレジオ会員は、ウルグアイ(1876)、ブラジル(1883)、チリ(1887)、そしてドン・ボスコの死の3日前、エクアドル(1888)に入りました。1875年から2019年までの間に150回の宣教派遣が行われ、10,571人の宣教師がトリノ、ヴァルドッコの扶助者聖マリア大聖堂から派遣されていったのです。



「どんな時も福音を告げなさい。 必要な時は、言葉を使って」



宣

教地に行きたいという私の熱烈な望みは、修練院の共同体で共に暮らしたペルー出身のサレジオ会宣教師（アントニオ＝ハビエル・バツリエントス神父）によって呼び覚まされました。アントニオ神父は、宣教地のこと、世界でサレジオ会宣教師が必要とされていることを私たちによく話しました。この人は、聖ルイジ・ヴェルシリア司教と聖カリスト・カラヴァリオの伝記を私に読ませました。二人が中国のために何をしたかを知り、私は宣教師の生き方にますます情熱を抱くようになりました。

すべての宣教師にとって生活の最初の挑戦は、言葉、食べ物、気候への適応などだと思います。しかしそれは、誰もが経験しなければならない普通の挑戦です。私が直面した主な挑戦は、イエス・キリストの愛について若者たちに公然と話すことが許されなかったことです。私たちの学校の場合、特にそうです。生徒の大多数がイスラム教徒だからです。講話をするとき、誰の気持ちも害することがないように、気をつけて言葉を選ばなければなりません。

アルバニアのコソボに派遣されるオベディエンツァを受ける前、私はヨーロッパ以外なら世界のどこにでも送ってくださいと神に祈っていました。自分には人種的な偏見があったのです。神はどうされたでしょうか？ まさに行きたくなかったところに私をたどり着かせました（これが私たちの神の美しさです）。この5年をふりかえると、私は自分の経験からアシジの聖フランシスコの言葉を味わい、実践できるようになりました。「どんな時も福音を告げなさい。必要な時は、言葉を使って」。地元の人々との良い人間関係、人々からの信頼、人々の中にいて自分が幸せであることは、私にとって、自分がここにいることを神が望んでおられるという明瞭なしるしです。

宣教師になることを希望する若いサレジオ会員に一言：宣教師の道に神が呼んでおられると感じているのですか？ 心を強くし、勇気をもってください。恐れなくてください。落胆しないでください、なぜならあなたの神、主は、あなたが行くところどこでも共におられるから（ヨシュア記1・9参照）。安全地帯を後にするのを恐れなくてください、出かけて行き、すべての人のために神の愛のしるしとなってください。

ザンビア出身、コソボの宣教師 ドン・ニイカ神学生



サレジオの宣教の聖性のあかし

サレジオ会列聖申請人 ピエルルイジ・カメローニ神父



福者 アルベルト・マルヴェッリ (1918 - 1948)、リミニのサレジオ・オラトリオ卒業生。アルベルトは小さなノートに書いている：「仕えられるより仕えるほうが幸い。イエスは仕える。」キリスト者の信徒は、特に共通善への奉仕として理解される政治、社会に関わることを通して信仰を表す：「常に仲間の模範となり、あらゆる機会に信仰を擁護することを、主の助けによって、私は願い、提案する。人間の思いではなく、いつも神のより大いなる栄光に心を向けながら。」アルベルトはこの奉仕の精神で、社会人としての責任を生き、政治への取り組みを社会共同体への奉仕と感じ、そのように生きた：政治的活動は生きた信仰の最高の表現となりえ、またそうでなければならない。アルベルトはドン・ボスコが望んだように、サレジオの心で教会と社会に献身する善いキリスト者、誠実な市民だった。

宣教グループのために

子ども、若者、大人の宣教グループが、
すべての共同体の中に育ちますように。

宣教の活気づけは、サレジオのあらゆる青少年司牧において横断的に存在し、刷新の新鮮な空気をもたらす、司牧、宣教、召命への取り組みを促進します。私たちのさまざまな教育司牧共同体において宣教グループが盛んになるよう、祈りましょう。



サレジオ会の宣教の意向

